

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点

個別人権課題をテーマとして効果的に取り扱った実践事例

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村名

大阪府松原市

○学校名

松原市立松原第六中学校

○学校のURL

<http://www2.schoolweb.ne.jp/weblog/index.php?id=2720012>

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 12 学級、【特別支援学級】 3 学級、【合計】 15 学級

○児童生徒数

【全児童生徒数】 421 人（平成27年11月26日現在）
（内訳：1年生 151 人、2年生 131 人、3年生 139 人）

○人権教育開発推進事業、人権教育研究推進事業実績（実施年度及び事業の別）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標など

【学校の教育目標】 信頼と自信、そして誇りある六中づくり

① 「生きる力」「つながる力」を育み、地域と協働し、ともに歩む信頼される六中づくりをしよう！

② 「授業改善」「家庭・地域との連携を通じた『確かな学力』・習慣の育成」を目指した学力向上の取組を推進しよう！

【人権教育に関する目標】 「つながりを広げ、深める学校に」

○人権教育に係る取組一口メモ

自分と他の人の大切さが認められるような環境、人間関係づくりを土台とした人権教育の推進

○人権教育にかかる取組の全体概要

○ 3年間の人権教育のテーマ『いのちの学習』

○ 全学年を共通して、「震災学習」「平和学習」「人権週間の取組」を実施

○ 学年ごとに、様々な立場のある方との出会いを通じて、生き方に学び、また学んだことを生徒同士で交流し、深め合い、更に人間関係をつなぐ取組を実施

- ・ 1年生 コリアタウンのフィールドワークを位置づけた国際理解教育
- ・ 2年生 夜間学級との交流、聞き取り等、多文化共生学習
- ・ 3年生 同和問題学習等、個別人権課題をテーマとした学習

3. 特色ある実践事例の内容

(取組のねらい)

本校区では多文化共生・国際理解教育を始め、震災学習、平和学習、同和問題学習等の人権学習を通じて、様々な立場の方の生き方に学び、人権感覚を育み、ちがいを豊かさに、共に学び合う子供たちの育成をねらいとしている。

(取組のきっかけ)

本校には、外国にルーツのある生徒たちが在籍している。毎年、校区小学校より外国籍又は外国にルーツのある子供たちが入学してくるだけでなく、外国から直接の途中編入もある。学校として、外国にルーツのある子供を含め、全ての生徒たちがアイデンティティを育み、一人一人がエンパワーしていけるよう支援していくこと、当該の子供や保護者の思いをしっかりと受けとめること、学校と地域が連携し子供を支援することが重要と考え、多文化共生・国際理解教育の取組を始めた。

(取組の内容)

○ 1年生：『コリアタウン』フィールドワーク

【内 容】 コリアタウンへのフィールドワークを中心とした国際理解教育の取組

事前学習として、韓国・朝鮮の文化や歴史について学び、フィールドワークで文化にふれ、聞き取りを通じて、コリアタウンの歴史と今を学ぶ。お話から、自分の生活や生き方と重ねて考える。

○ 2年生：『夜間学級』との交流

【内 容】 夜間学級との交流、聞き取り等による多文化共生学習の取組

事前学習として学年全体で夜間学級について学び、外国にルーツのある方も多い夜間学級の生徒さんとの交流、聞き取りを通じて、生徒さんの生き方に学ぶ。夜間学級への体験入学を行い、様々な困難を乗り越え「生きることは学び続けること」と言いきる生徒さんの生き方を、共感的に理解する。



○ 3年生：『同和問題学習』の取組

【内 容】 同和問題について知り、主体的に考える力を養う取組

2年生の職場体験学習をふまえ、「進路」「就職」をキーワードに学習を行う。就職の際の応募用紙について「統一応募用紙」が作成されるようになった過程を学習する中で、同和問題があったことを知る。また、識字学級に通う生徒さんからの聞き取りを行い、厳しい生活を乗り越え生きてこられた思いにふれ、どのような社会を築いていくことが大事なのか、子供たちが感じ、考えたことを伝え合

う機会を持つ。

○ 『松原市国際交流キャンプ』への参加

松原市国際交流キャンプは、外国にルーツのある子供たちが、日常の緊張や不安から解放され、互いのアイデンティティを大事に交流する場として、市教育委員会主催で開催している。

夏の長期休業期間を利用して、小学5年生から中学3年生までの外国にルーツのある子供たちとその仲間が参加し、交流を行う会となっている。毎年80人を超える参加となっており、交流を通して、自らのルーツに誇りを持ち、仲間の生き方に寄り添い共に高め合える場となっている。また、過去に国際交流キャンプに参加した先輩からの聞き取り行っており、子供たちにとっては、ロールモデルとの出会う貴重な機会となっている。



本校の生徒も毎年参加希望があり、学校での2学期以降の良好な人間関係につながっている。

4. 実施する際に生じた課題及びその解決策

(取組を実施する際に生じた課題)

[課題①]

生徒たち自身が、聞き取りや交流等で学んだことを、自分の問題としてとらえられるかどうかは課題であり、工夫が必要である。

[課題②]

急激な世代交代により、経験年数の浅い教員が増える中、取組の目的等が学校全体で共有が不十分な場合がある。取組後の検証を十分に行い、次の取組の改善方を、共通理解する場を作る必要がある。

[課題③]

子供たちの学びを地域、保護者の方に伝えていくか、また学校の取組を理解し支援していただく体制づくりが求められる。

(課題に対する解決方法)

[課題①の解決方法]

第1に、教員が一人一人の生徒のよさや抱える課題を把握し、常に共有することを心がけた。

第2に、日常の生徒同士のつながりを深める取組を充実させた。人権学習の場面だけではなく、各学年の宿泊行事でのクラスミーティングや、学級・全校スピーチ大会など、日常、生徒が自分の感じたこと、考えたことを伝え合う場面をつくるようにした。

[課題②の解決方法]

教員自身が人権課題と向き合い、自らの人権感覚を高める場をつくるようにした。

全体研修会や会議だけではなく、学年会で議論を活発に行えるよう工夫し更に、校内の経験年数の少ない教員を対象に行う研修体制も整え、より一層、組織的に取り組めるよう、体制を改善した。

〔課題③の解決方法〕

聞き取り等、学校の取組に地域の方に参加していただくようにし、学校の取組の目的やその過程を機会あるごとに伝えるようにした。学校、教員、生徒たちへの評価をしていただく場面も設定するようにした。

5. 実践事例の実績、実施による効果

人権学習を通じて、生徒一人一人が友達と思いや考えを重ね、自らの生き方を見つめることができ、つながりがより深まった。その結果、外国にルーツのある子供たちが、自分たちのアイデンティティを育み、胸を張って自分自身の思いを語れるようになった。そんな姿を見て、周りの子供たちもまた、自分の夢や成長を語り、つながりを自信に変え、中学校卒業後の進路の実現に向けて、共に努力する姿が見られた。

何より取組を通じて、教員の生徒たちへの見方、指導や関わりが変わったことが一番大きい。

(子供たちの取組の感想)

○ 『コリアタウン』フィールドワークについて

- ・ コリアタウンのフィールドワークに行って、韓国・朝鮮の文化に少しふれることができました。松原からそんなに遠く離れていないところで、韓国・朝鮮の文化がこんなにたくさんあってびっくりしました。日本との違いが興味深かったです。
- ・ コリアタウンで活動されている方と出会って、いろんなことを知ることができました。国や文化・言葉がちがうことで、おたがいに嫌な気持ちになったり、いじめたりするんじゃないかと、おたがいの生き方を認め合っていけたらいいのになって感じることができました。私も私の生き方、まわりの友達の生き方を大事にしていきたいと思いました。

(子供たちの取組の感想、ミーティングでの語りの一部)

○ 『夜間学級』との交流を通して

- ・ 夜間学級の生徒さんとの話の中で、心に残っている言葉があります。それは、「夜間学級は私にとっていきがい」という言葉です。きっとたくさんの生徒さんがそう思っているんだと思います。夜間学級はなくてはならないものだと思えました。
- ・ 僕の祖父と同じような年齢の人で、日本語を一生懸命勉強している人に出会いました。自分でも気づかないうちに、その人と中国語で会話していました。

そのことを周りの友達に言われてちょっと照れましたが、すごくうれしかったです。

- ・ 今、僕が中学校で勉強できているのは当たり前じゃないと思った。夜間学級では、文字が読めなくても勉強がなかなか進まなくても、笑わずにちゃんと教えてくれる。学ぶのに年齢は関係ない、文字が書ける、わかる喜びは生きていく上で大事なことだと思う。

○ 『国際交流キャンプ』へ参加して

- ・ 私は、3年生の夏休みに国際交流キャンプに参加しました。私は、外国にルーツを持っていることが嫌でした。しかも、人前で話すのが苦手な私は心が重たかったです。キャンプは、松原市内の中学校や小学校からたくさんの仲間が参加していました。夜のミーティングのとき、高校の先輩が、「自分のルーツが嫌で親に八つ当たりをしたことがある」と、話してくれました。私もその気持ちがよくわかりました。でも、話を聴いて、慣れない日本でがんばっている母の姿を思い浮かべることができました。進路の書類に一生懸命日本語を書いている姿、それを思い出したとき、感謝の気持ちでいっぱいになりました。キャンプから帰って、母のために何かしてあげたい、高校に入って母を安心させたいと思うようになりました。私はみんなに変わったと言われるぐらい変わったと思います。

6. 実践事例についての評価

(取組についての評価、及びそう評価する理由)

- ・ 人権教育を土台に据えた学校運営を充実させることが、取組の成果につながったと考えている。本校では、教師と子供、子供同士をつなぎ、保護者・地域からの信頼ある学校づくりが大きなテーマである。ちがいを豊かさに共に学び合う子供たちを、学校を含め地域の中で育てるという目標が、学校全体で共通理解され、取り組めたことも大きな成果の一つである。
- ・ 経験年数の少ない教員が増える中、組織体制のより一層の活性化と充実、また共通理解をどう図るか、取組等の目的をどう共有するかが課題であり、今後も大事な視点である。
- ・ 中学校の学びが校区連携へと広がり、幼小中での共通した活動を通して、共に学び合う校区へと広がっている。人権教育を視点とした校区連携で、幼小中11年間でどんな力をつけさせたいか、そのためにどんな取組を進めていくか、まずは教師がつながり、同じ思いや願いのもと実践を積み重ねてくことができる素地はできつつある。校区の特徴を生かしつつ、子供たち一人一人が生き生きと過ごすことのできる校区になってきている。校区の学びの積み上げが今後のカギとなる。

【人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント】

松原市立松原第六中学校

本校の校区には外国にルーツのある方たちが多く住み、「外国籍又は外国にルーツのある子供たちが」入学、在籍している。このような実態を受け止め、すべての生徒が元気に人生を送れるよう、人権課題を明確に打ち出して全校をあげて系統的に学んでいる。しかも、校内で学ぶだけではなく、テーマに即して校区内外のフィールドワークや聞き取りを位置づけ、生徒が体験や協働を通して学べるよう工夫している。学習で取り組む人権課題も、「多文化共生・国際理解教育」をはじめ、ほかにも、同和問題や夜間中学校など、生徒が自己理解を深めるためにも幅広く取り込んでいる。人権課題を打ち出すだけではなく、その土台としてクラスミーティングを始め、生徒同士がつながるための地道な活動を重ねている点も大きな意味を持つ。教員の世代交代が重要な課題となっている大阪府にあって、経験の浅い教員が自分に即して考え、主体的に取り組めるよう多くの組織的な工夫を重ねている。